第２回　協働のまちづくりのあり方検討会　議事概要

日　　時：2026 年（令和８年）９月 29 日（火）10:00～12:00

場　　所：明石市役所議会棟大会議室

出席委員：新川会長、竹端副会長、大野委員、河野委員、石井委員、園田委員、佐伯委員、田村委員、北野委員、髙見委員、秋田委員

―――

１　開会

２　市長あいさつ

本日は雨で足元の悪い中、第２回「協働のまちづくりのあり方検討会」にご出席いただき、ありがとうございます。

前回は、これまでの 10 年間の成果を評価するとともに、担い手不足や、人や活動をつなぐ役割、情報の届け方など、今後に向けた多くのご意見をいただきました。若い委員の皆さんも積極的にお話しくださり、うれしく思っています。

本日は、10 年後に地域がどのような姿になっていたらよいか、その姿に近づくために何が必要かについて、お話しいただきたいと思います。また、まちづくり協議会の役割や存在、これからどのような形を目指していくのかについても、ご意見を伺いたいと思います。

10 月 19 日から 25 日まで開催する第２回「あかし対話と共創ウィーク」では、28 の小学校区を４つの地域に分け、まち協の役員や自治会の皆さんとのタウンミーティングを行う予定です。

この検討会でのご意見や議論の状況をお伝えするとともに、地域で活動されている方々の声を伺い、再び検討会にお返しすることで、オール明石でこれからの協働のまちづくりを考えていきたいと思っています。

本日は私も最後まで出席し、皆さんのご意見を伺いながら、一緒に未来を紡ぐ時間にしたいと思います。遠慮なく、思ったことをお話しください。私自身も学びの時間にしたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

３　資料説明について

事務局より、資料３、資料４について説明

４　意見交換

会長　10 年後の地域の姿を考えるため、現在をどう捉え、今からどのような一歩を進めるかを議論したいと思います。変えること、続けること、発展させることを考え、現在のまち協の位置付けや役割にも触れてください。資料への質問からでも結構ですので、自由にご発言ください。

委員　第1回では、異なる立場からの発言を聞き、自分には見えていなかったことに気付きました。庁内アンケートを見て、行政も以前より大きく変わったと感じます。藤江では、地域の人のつながりづくりに加え、駅周辺など行政の協力が必要な課題にも取り組んできました。複数の部署が真摯に関わり、実現に至ったことは、地域にとって大きな喜びです。行政との協働でまちづくりが進んできたことを評価しています。

会長　行政の変化を評価いただきました。一方、庁内には地域との関わりが十分でない部署もあります。この現実をどう考えるか、ご意見をお願いします。

副会長　資料3の問10には「現時点では具体的な連携が思い浮かばない」という回答が55件あります。他方、資料4の魚住や林の事例では、コミュニティ・生涯学習課が地域を支え、つないでいます。庁内の部署によって、地域との関わり方に違いがあるということでしょうか。55件の回答が何を意味するのかを知りたいと思います。

委員　すべての部署と同じ深さで関わっているわけではありませんが、私が関わった地域の課題では、コミュニティ・生涯学習課だけでなく、道路や福祉などの担当部署も協力してくれました。地域の立場からは、行政の姿勢が大きく変わったと実感しています。

事務局　問10で具体的な連携が思い浮かばないと回答した部署には、市民や地域と直接接する機会の少ない部署や、庁内向けの業務を担う部署が多いと認識しています。

委員　議論の前提として、アンケートの回答数 109 が何を表すのかを確認したいと思います。職員109人なのか、部署の数なのかで結果の読み方が変わります。

事務局　市役所の課や担当などを単位に依頼し、109の回答をいただきました。複数の担当をまとめて回答した部署もあるため、組織の数と単純に一致するものではありませんが、基本的には各課から回答を得たと認識しています。

委員　今回の設問はまち協との連携を聞いています。自治会との関わりを尋ねた場合には、回答の傾向が変わる可能性がありますか。

事務局　感覚的な回答になりますが、自治会を対象とした場合には、関わりがあると答える部署が多少増える可能性はあると思います。

委員　行政は、地域に対して、まち協を窓口とし、その中に自治会もあるという捉え方をしている印象があります。

委員　問4の結果で、子ども・若者に関わる部局の連携が目立たない点が気になります。業

務の性質によるものなのか、まち協との接点をイメージしにくいからなのか、確認したいと思います。

事務局　各部署への詳しい聞き取りはまだできていません。一部には、これまでまち協との接点が少なく、具体的に何ができるかイメージできていないという話を聞いています。連携の可能性が見えれば取り組みたいという声もあります。

市長　保育所や幼稚園などの現場では地域と関わっていますが、今回のアンケートでは、庁内の部署を調査対象にしているため、その関わりが回答に十分表れていない可能性もあります。子どもや若者に関する取組も、地域の協力と結び付けられると思います。

副会長　子どもや若者の思いをまち協がまだ課題として捉えておらず、市の担当部署もどうつなげればよいか分からない場合があります。コミュニティ創造協会、生活支援コーディネーター、学校関係者など、現場でつないでいる人は複数いますが、誰がどのようにつなぐのか、全体像を考える必要があります。

事務局　行政と地域をつなぐ役割において、コミュニティ・生涯学習課の担当は、まち協を支援し、現場で聞いた声を庁内の部署に伝えたり、まち協から相談を受けたりしています。一方、道路や子どもなどの各部署も個別に地域と接しています。これらの情報をまとめてつなぐことは、現状の課題だと認識しています。

委員　社会貢献をしたい企業、団体、個人が、気軽に相談できる入口があるとよいと思います。ちょっとしたことでも「何かできないか」と話せて、地域が必要としていることや、その人の力を生かせる場につなぐ仕組みが考えられます。

委員　コミュニティ・スクールのコーディネーターとして活動しています。学校とまち協との関わりは大きいと感じますが、まち協の方では、コミュニティ・スクールをどのように捉えていますか。

委員　学校だけに任せず、地域住民も一緒に子どもを育てる仕組みだと捉えています。藤江では、家庭科の授業で地域の人が子どもの裁縫を手伝い、まち協の防災の取組を授業で伝えることもあります。子どもと地域の人が接し、互いに学び、将来のまちづくりへの関心につながってほしいと思います。

委員　「子どものために」という呼びかけは、地域の人が協力するきっかけになります。そうした関わりが、これからの地域づくりを考える入口にもなると思います。

委員　若い人には、活動したくてもどこに相談すればよいか分からないという声があります。既存の相談先があるなら分かりやすく案内し、気軽に話せるようにすることが大切だと思います。

会長　市内に相談先や活動の窓口はあっても、初めて行く人にはハードルがあるかもしれません。気軽に話を聞いてもらえる人や場所について考える必要があります。

副会長　学校、福祉、まち協などに、それぞれコーディネーターがいます。個々の人が持つ地域の情報や若者の「やってみたい」という声が、どうすれば互いにつながるのかを考えたいと思います。市役所にすべてを一元化する方法が適切かどうかも含めて議論したいです。

委員　まち協が地域の大きな窓口になることは分かりやすい半面、そこには関わりにくい人も出てきます。地域に複数の「止まり木」のような場があれば、地域との関わり方も多様になります。それぞれのコーディネーターが「止まり木」となり、時々情報交換することで、より重層的なコミュニティになるのではないでしょうか。そうした時、市が誰と、どう連絡を取り合うのかも考える必要があります。また、庁内アンケートの問 10 を見ると、まち協に情報を届けたり地域の情報を得たりする橋渡しの機能を期待する回答が目立つと受け止めました。10 年後のまち協を情報伝達の窓口として考えるのか、市と一緒に活動する相手として考えるのかは、検討すべき論点です。

委員　庁内アンケートの問 11 では、まち協とどのような形で連携できるのかが、庁内で十分共有されていないように思います。具体的な連携事例が見えるようになれば、さまざまな連携につながる可能性があると思います。

委員　自分が住む地域でなければ活動できないと考える必要はないと思います。地元に入ることにハードルを感じる人も、働いている地域や関心のあるテーマから関わることができます。まず、地域に関わる面白さを知り、後に地元へ戻って活動する道もあります。

副会長　若い世代にとっては、小学校区を単位にした方が関わりやすいのか、それとも明石全体や校区を越えた活動の方が参加しやすいのか、若い方々の実感を聞きたいと思います。

委員　自分にとっては小学校区の方が身近です。小学校の頃から地域行事に参加し、地域の人や同級生との思い出があります。そうしたつながりが、地元の活動に関わるきっかけになると思います。

委員　小学校で過ごした地域には入りやすさがあります。一方、高校生になると、同じ学校

の仲間と活動したい場合もあります。そうした活動は、自分の住む校区以外でも参加できる方がよいと思います。

副会長　小学校区など地縁をもとにしたつながりと、趣味や関心をもとに校区を越えて集まるつながりがあるということだと思います。これからの 10 年は、その両方を生かすことが大切ではないでしょうか。

委員　地縁の活動には大切な役割がありますが、それだけでは広がりに限界を感じることもあります。近隣の地域や市外の活動も紹介し、どこかで地域の面白さを知った人が、地元にも関わっていくことを期待しています。

委員　まち協が出来て 10 年になりますが、完成したとは考えていません。地域の皆さんが楽しく、元気に暮らせる活動の機会を増やすことと、自治会の担い手が減る中で、防災・防犯に必要な近隣のつながりをどう保つか、その両方が大切です。まち協がすべての事業を実施するのではなく、人や活動の拠点をつくり、つないでいく役割も考えたいと思います。

委員　錦が丘では、まち協の大きな恒例行事は運営方法が整い、安定して続けられるようになりました。次は、同じ趣味や年代で集まる小さな活動をどう増やすかを考えています。ただ、新しい企画をすべて特定の人が担うと負担が大きいため、地域の中で「こういうことをしたい」と言う住民の声をどう拾うかが課題です。

委員　まち協とコミセンが一体になり過ぎると、コミセン以外の活動が見えにくくなるかもしれません。まち協が直接運営しない拠点や、別の団体がつくった場も含め、地域の拠点同士をつなげることが今後のあり方として考えられます。藤江のオアシスの立ち上げでは、どのような支えがありましたか。

委員　藤江駅前を良くしたいという住民が、オアシスをつくる前から集まり、プロジェクトを進めました。自分たちがしたいこととして取り組めたことが力になりました。立ち上げの際には、行政の立場にある方も知識や人脈を生かして、住民の活動を陰でつないでくれました。そうした支えは大きかったと思います。

会長　拠点が複数あると、人が話しに行く場所も増えます。他の地域では、拠点の数やつながりについて、どのような可能性を感じますか。

委員　錦が丘でも複数の場所があること自体はよいと思いますが、拠点同士をつなぐネットワークが十分でないところがもったいないと感じます。

委員　他自治体では、地域ごとに複数の行政職員が担当し、地域の話を聞き、必要な部署につなぐ取組があります。明石でも、例えば地域単位で部署横断の緩やかなチームをつくり、福祉局やコミュニティ・生涯学習課などが持つ情報を共有できれば、新しい連携が生まれるのではないでしょうか。

副会長　地域担当職員が地域の話を聞き、必要な情報を庁内の担当部署につなぐことを、仕事として位置づけることが重要です。こうしたつなぎ役がいなければ、他分野との共創も難しくなります。また、優秀な職員が個人の善意で支えているだけでは、異動すると関係が途切れるため、組織の機能として考える必要があります。

委員　「やってみたい」を応援することも大切ですが、同じことを面白いと感じ、一緒に楽しんでくれる人がいると、さらに始めやすくなります。地域の人がどのような仕事や経験を持っているかを、子どもたちと一緒に聞く取組をしています。仕事の話をするうちにその人との関係ができ、次の活動の協力者にもなっていきます。

委員　祭りなどの活動は、誰かが知恵と労力を出して成り立っています。参加する側もそのことを知り、感謝しながら楽しむ気持ちが広がると、地域の大きな力になります。次の 10 年を考えるにあたり、活動そのものを楽しむ人と、それに参加して思い切り楽しもうとする人が増えると、地域はもっと元気になると思います。

副会長　まち協の役員会で課題への対応を決める前に、「最近この地域で気になることがある」「何か面白いことができないか」といった、まだ形になっていない思いを話す場はありますか。

委員　そのような場は少ないと思います。錦が丘には公園内の事務局にふらっと来られる人もいますが、誰もが気軽に話せるところまではできていません。

副会長　課題や企画として固まる前の「モヤモヤ」を、まち協の外の人や他分野のコーディネーターも交えて話せると、誰かの声と結び付いて新しい活動が始まるかもしれません。

委員　藤江のオアシスは駅前の休憩所として、住民や通り掛かった人がお茶を飲み、自然に話せる場になっています。雑談の中で、音楽ができる人など、その人の得意なことが分かります。そこから人同士をつなぎ、役員以外の住民が中心となる催しも生まれました。会議として集まるのではない、自由な対話の場があることは大きいと思います。

委員　地域によって、まち協の活動が住民によく見えるところと、何をしているか分かりにくいところの差を感じます。自治会でも役員が毎年交代し、その年を終えることが中心になる場合があります。住民と話せる場を増やし、やりたい人を見つけてつなぐことが、差を埋めるきっかけになると思います。

副会長　若者の親世代は、まち協との関わりが少ないように感じます。仕事が忙しいから関心がないのか、今の参加の仕方が合わないのか、親御さんの様子からどう感じますか。

委員　母の世代には、PTA や子ども会で活動していた人もいますが、仕事をしながらでは参加しにくい人もいます。以前より子ども会などが減り、関わる機会自体も少なくなっていると思います。

委員　PTA の役員などは、引き受けたら次は免除されるというような、負担として捉えられる面があります。私の母も役員を経験しましたが、時間を取られるので、もう一度やりたいとは思わないようです。父は土日も仕事があり、地域の役員にはほとんど関わっていません。

副会長　親世代にとって地域との接点が負担の経験に結び付いていると、まち協にも関わりにくくなります。どのような形なら参加できるかを考える必要があります。

委員　働いている人は時間が限られています。最初から運営を担うより、まず行事に気軽に参加することから始められるとよいと思います。

委員　地域に関わることが「大変」だけで終わらず、「楽しい」と感じられる経験をどうつくるかが重要です。地域に関わるのが楽しいと思う人を増やすには、まち協が地域に必要なコーディネーターを増やす方法も考えられます。その際、地域に人をつなぐ役割を、個人の善意だけに任せず、仕事として担うことも考える必要があるかもしれません。一方、市の各部署それぞれにコーディネーターを置くと、今度はそれらをどうつなぐかの課題が出てきます。

委員　地域には、肩書がなくても自然に人をつなぐことが上手な人がいます。役割に名前を付けたり仕事にしたりする方法には利点がありますが、名前が付くと負担に感じる人もいます。そうした人を見つけ、気軽に連絡できる関係をいかにつくれるかが、今後の課題です。そのために、私たちが運営するカフェのような場では、スタッフが日常的に雑談し、小さな気付きをメモして共有する実践を続けています。一人ひとりの関心や変化に気付く力は、そうした積み重ねで育つと思います。

委員　藤江の秋の催しでは、マルシェの出店者にも実行委員会に入ってもらいました。約 30 の出店があり、出店者から専門的な知識も教わっています。今後は、出店者や出演者がさらに主体となり、まち協が支える形にしたいと思います。まち協がすべての事業を自ら実施するだけでなく、人をつなぐことも役割です。

委員　私たちの地域でもマルシェを始めましたが、出店者が運営主体になるところまでは進んでいません。結局、まち協が企画や発信を担い、出店者は参加する形になっています。どうすれば一緒に運営する人になってもらえるのでしょうか。

委員　まち協がすべてできるように見せると、仕事がまち協に集まります。困っていることを伝え、助けてほしいと声を掛けることも一つの方法だと思います。

委員　10 年後には、地域に関わる人が増え、「この地域に住んでよかった」と感じる人が増えるとよいと思います。そのためには、まち協も市職員も、待つだけでなく地域へ出ていくことが必要です。他地域では、担当者が外に出て人と話し続けることで、参加のきっかけをつくっている事例があります。人を集める講座だけでは、既に自分のやりたいことを言葉にできる人に届きやすく、まだ活動前の思いを持つ人には届きにくい面があります。現在は、地域を回りながら話を聞くインタビュー企画に変えています。

副会長　「やってみたい」を言葉にできない人にも、30 分ほど話を聞くと関心が見えてくることがあります。講座で一律に育てるだけでなく、人に会って話を聞き、誰かを紹介し、少し試してみるという過程を人材育成として考える必要があります。

会長　人は待っているだけでは集まりません。一人ひとりのところへ丁寧に出向き、話を聞いて一緒に地域を考えることが重要だと感じます。

委員　オアシスには高齢者以外の世代も来ていますか。子育て中の親など、接点をつくりにくい人についてもお聞きしたいと思います。

委員　高齢者が多いものの、乳幼児を連れた親、小学生、中学生など、幅広い世代が利用しています。子育てや健康の相談につながる機会、パンの販売など、立ち寄るきっかけをいくつも設けています。ただ、働く親世代との接点はまだ十分ではなく、声掛けを続けたいと思います。

委員　人に「何ができますか」と尋ねると、答えたことで役割に縛られるのではないかと感じる人もいます。「この日だけ」「30 分だけ」といった誘い方なら、気軽に試せると思います。実際に少し関わってもらう中で、その人の力が見えてくることもあります。

委員　高校の同窓会では、若い人が運営に関わり、また、文化祭では一般の人にも開くことで、普段出会わない地域の人や他校の人と接する機会がありました。人と関わること自体が楽しいと感じました。

委員　コミセンよりも気軽に立ち寄れるところがあると、若い人も入りやすいと思います。また、やってみたいことがあった時に、一緒に進め、支えてくれる人がいることも大切です。

委員　気軽な窓口が地域にあっても、そこにいる人が笑顔で迎え、話を聞き、「面白そうですね」と前向きに応じてくれるかが大切です。話を聞いて小さな気付きを記録することも、活動の芽を見つける上で重要だと思います。

委員　人口や担い手が減る中では、常設の場所やスタッフをそれぞれの地域で維持できるかも考える必要があります。一つの団体だけで抱えず、団体同士をつないで地域全体で支えることが重要です。また、10 年後を考えると、今の子どもたちの経験が大切です。子どもには行事の参加者としてだけでなく、企画や運営に関わる経験を積んでもらいたいと思います。

会長　最後に振り返りをしたいと思います。第一に、市の地域への向き合い方は変わってきましたが、これからは職員が地域にどう入って声を聞くかを考える必要があります。第二に、地域の一人ひとりと多様な活動がさらに活発になり、住民が楽しく、幸せに暮らせる 10 年後の姿を考えたいと思います。第三に、人の思いや地域の力を引き出すきっかけ、場、コーディネートの役割、必要な仕組みを考える必要があります。第四に、まだ課題として固まっていない思いも話せる雰囲気を地域につくることが大切です。一つひとつの活動を共感しながら楽しみ、その人たちが互いにつながり、支え合う地域をどうつくるかが、まち協、市、企業、NPO、ボランティアなどに共通する課題だと思います。

会長　本日の議論を踏まえ、次回も協働のまちづくりのあり方を考えていきたいと思います。

市長

本日は長時間にわたり、有意義な議論を重ねていただき、ありがとうございました。私は「市民みんなで、みんなの明石をつくりたい」という思いで市長になりました。みんなでこ

のまちをつくっていく文化が根付くよう、仕組みづくりやさまざまな取組を進めていきたいと思っています。

庁内アンケートについて、市が変わったと評価していただきましたが、さらに変わる必要があると考えています。庁内横断的に共創を進め、市民目線で仕事をするという視点を職員に根付かせることは、私の役割です。研修や仕組みづくりを通じて、組織を少しずつ変えていきたいと思っています。

今日の議論から、特に「場」と「人」が重要だと感じました。私自身、環境教育コーディネーターとして活動してきた経験もあり、地域で人や活動をつなぐ人が各小学校区にいるよう、そうした人を育てる仕組みを考えたいと思います。

また、オアシスのような柔らかい場を参考に、今ある施設をどのように開いていくかについても、考えていきたいと思います。タウンミーティングにも、今日の議論の雰囲気を持っていきたいと思います。

そして 10 年後、それぞれの地域が「差がある」ではなく、「個性がある」と言える地域になればと思っています。引き続き、皆さんのお力、お知恵をお借りしたいと思います。本日はありがとうございました。

事務局　次回の会議日程は、改めて調整し、ご連絡します。以上をもちまして、第 2 回協働のまちづくりのあり方検討会を終了します。長時間ありがとうございました。